

研究報告

大島鎌吉のスポーツ思想に訊く (2)  
— 生き方の問題という視点において —

Discussion on Kenkichi OSHIMA's Sports Ideas (2)  
: A Viewpoint on the Question of a Way of Life

伴 義孝\*  
Yoshitaka Ban

キーワード 生き方 負性の身体化 身体の対抗文化 二重の危機  
way of life, negative somatization, counterculture of the body, on the double crisis

1. 緒言

1984年10月1日、大島鎌吉<sup>けんきち</sup>(1908～1985)の絶筆随想が「エレクトロニクスとコンピュータの開発で毎日の激動のなか」現代人は「考え方、生き方を選択させられている」と指摘した(1984, p.46)。大島は、個々人の思想「考え方」と実践「生き方」をも恣意的に方向づける近代化路線を、とりわけ放置できない生命原理の埋没現象を警告し呼びかけたのである。そして対決指針を提示した。

当面するふたつの問題点、すなわち「オリンピックと世界平和」と、「教育」について考えてみようと思う。(同前)

本稿では「オリンピック」と「教育」の当面する問題点に焦点をあてて考察し、他方でオリンピック憲章の問題提起も援用する。

オリビズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高めバランスよく結合させる生き方の哲学である。オリビズムはスポーツを文化、教育と融合させ生き方の創造を探究するものである。(傍点今次)

上記は憲章の眼目「オリビズムの根本原

則」の第一原則(邦訳条文の前2文節)である。しかし2003年版までは第二原則に定められていた。このように憲章はIOC決議で内容や構成も変わる。しかも「生き方の哲学」と「生き方の創造」は近代オリンピック復活後100年を経過した1996年版から明文化された。そのさい生命原理「生き方の問題」に基づく思想課題と実践課題を第一原則としたのには歴史的現実的経緯がある。

1984年の大島はIOC決議と同次元の問題提起を発信した。本稿では、かかる大島思想の形成過程に注意し、副題に定める「生き方の問題」の視点から歴史的現実的経緯について考察する。議論では現代の体育学に要請される課題についても言及してみる。

生き方の問題は下記に予め提示しておく要件の相互作用によって構造化される。

- (1) 本稿の問う近代化とは技術革新「文化創造」を原動力として開拓してきた過程として捉える。社会構成員はその文化を享受しないと生活していけない。
- (2) 技術革新はプラス側面とマイナス側面に

\* 関西大学(名誉教授・大島鎌吉スポーツ文化研究会主宰) Kansai University